<3ページからつづきます> ☞

今日のバプテストの伝道者に求められる要素として、宣研の朴所長は「祭司性、預言者性、知者性」という分類をしています。「祭司性」というのは人に寄り添い、いろいろな感情の機微に共感をして、慰めを与えていく役割でしょうし、「預言者性」というのは広く社会を見ていった時に、私たちが聖書からいただく観点からすると、とても神の国と呼べないような現実に対してきちんと「否」を言っていく、そのような感性・視点を育てていくことでしょう。また、「知者性」というのは神を畏れることを基本にして（箴言1：7）、その上でこの世にある様々な知識について、きちんと学んでいくということです。そして、その根底にはやはり「神学すること」、つまりあらゆる出来事を信仰的な事柄として自分自身で考え、そのことを他者と分かち合い、他者からきちんと批判されたり、吟味をし合うということに開かれていくことが必要です。というよりも、それが無いと、いくら色々なことを学んでも、どれほど刺激的な経験を積んでも、バプテスト教会の牧師として立つ備えにはならないと私たちは思っているのです。

注1：この原稿は2015年1月24日開催「きたかん壮年会研修会」での講演記録を大幅に加筆・修正したものです。

注2：新任牧師主事・研修会は、毎年度末に宣研主催で開催している研修会で、連盟諸教会に初めて牧師や主事などの職務で赴任される方々を対象としています。

2015年度総会議案

議案 1	2014年度全国壮年会連合活動報告の件
議案 2	2014年度全国壮年会連合奨学金委員会活動報告の件
議案 3	2014年度全国壮年会連合会計（一般会計、奨学金会計）決算報告、監査報告の件
議案 4	2016年度神学校献金（神学生奨学金献金）目標額の件
議案 5	2015-2016年度全国壮年会連合活動計画案の件
議案 6	2015-2016年度全国壮年会連合奨学金委員会活動計画案の件
議案 7	2015年度全国壮年会連合一般会計修正予算案 及び2016年度全国壮年会連合一般会計予算案の件
議案 8	2015年度全国壮年会連合奨学金会計修正予算案 及び2016年度全国壮年会連合奨学金会計予算案の件
議案 9	2016-2017年度全国壮年会連合役員選挙に関する件
議案10	全国壮年会連合規約改正に関する件
議案11	全国壮年会連合規約細則改正に関する件
議案12	全国壮年会連合奨学金制度に関する規程（全国壮年会奨学金規程）改正に関する件
議案13	連盟加盟の教会、関係諸機関についての規程に関する件
議案14	規則改定委員の件
議案15	2016年度総会議長の件
議案16	2017年度全国壮年大会開催担当地方連合の件

地方連合壮年会等代表者会議【報告】

◇開催日：５月１６日（金）～17日（土）（於連盟会議室）

出席：地方連合壮年会長、壮年会連合役員、奨学金委員、規則改定委員　陪席：事務局員、東京ブロック委員

◇主要審議事項　（本年度総会議案に対する意見交換と内容確認）

- 役員・監査、奨学金委員会から総会議案について説明し、意見交換した。また第５０回（担当：東京）と第５１回（担当：北九州）の全国壮年大会の内容や準備状況について、担当から説明を受けた。
- 役員会から、伝道者養成への業への参与の具体的施策として、若年期から青年期に献身の思いを育み、牧会の第一線に立つまで壮年が伴走し支援するプログラムに、神学生奨学金会計の繰越金（流動資産）を活用することを提案し意見交換した。原資となる神学校献金（神学生奨学金献金）の趣旨に照らして適切でないとの意見が大勢を占めたため今総会への議案提出は行わないが、伝道者養成の業への具体的な参与は壮年にとっての喫緊の課題であることを共有できるよう、引き続き取り組んでいく。
- 壮年会連合規約、規約細則、奨学金規程等の見直しについて、規則改定委員からの答申を基に意見交換した。今総会に成文化したものを提案する。

日本バプテスト連盟全国壮年会連合
〒336-0017 さいたま市南区南浦和1－2－4
事務局執務時間:月、水、金　10:00 ～ 16:00
☎・fax:048－886－7533　http://www.sonen.net　sonen@bapren.jp

伝道者養成＆教会形成
全国壮年会連合 NEWS
第87号
2015年6月15日 発行
日本バプテスト連盟
全国壮年会連合
発行人：大城戸一彦
編集人：井伊肇
Topics password▸sorengo

神学校献金(神学生奨学金献金)郵便振替　00150-7-669605　日本バプテスト連盟　全国壮年会連合事務局

～人と人とのつながり～　第50回全国壮年大会in東京へのご案内

第50回全国壮年大会実行委員会
実行委員長　山田誠一（大井バプテスト教会）

主の御名を賛美いたします。

今年の全国壮年大会は8月21日（金）～８月22日（土）、羽田空港から近い物づくりの町京急蒲田駅前の大田区産業プラザPIOと大井バプテスト教会を会場にして開催いたします。全国の皆様のご参加を心からお待ちしております。

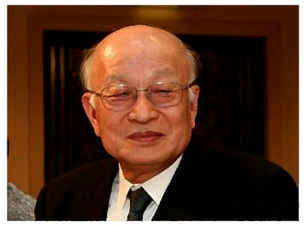
8年ぶりの東京での開催ですが、リーマン・ショックのあと大きく衰退し空洞化した産業の影響により人々の生活は苦難へと追いやられて行きました。物づくりの町（中小企業が多い）であるこの地域の姿はリーマン・ショック前とは大きく変わりました。見た目は綺麗になった感じですが、多くの人が路頭に迷い、生きる力を失い自死に追い込まれる方が増えています。

人身事故で電車が止まるのに馴れっこの私たち。

東京だけのことではないでしょう。現在はアベノミクスで日本は立ち直ったように思われています。しかし、そうでしょうか？格差は逆に広がっています。自分の感情を抑えて相手の気持ちに働きかける仕事を「感情労働」と言うそうです。介護や保育、飲食などの接客業が典型です。きつい仕事なのに年収は安い。そして心や体が病んでいくと使い捨てです。私たちキリスト者はどのように隣人に接したらいいのでしょうか？

主題講演ではキリスト教カウンセリングセンター相談所長・理事長の賀来周一師より「人と人とのつながり」をテーマに語っていただきます。神は主イエスをお与えくださったほど人を愛されました。自分を含め人と人はどうあるべきかをじっくり考え、これからの歩みに生かしたいと思います。

また、プログラムは主題にそったものとなっています。全てを人と人との関わりと交わりを重点に置いたものとしました。壮年だけではなく、女性・青年の方々にも参加してほしいと願い準備をしています。今年の夏、皆さんを東京でお待ちしております。在主



主題講演　賀来周一師

会場　大井バプテスト教会正面

大井バプテスト教会礼拝堂

大田区産業プラザＰＩＯ

－東北連合壮年会－

会長　向井田洋（仙台基督教会）

「壮年」と聞いてどんなことを思い浮かべますか。辞書によると、壮年とは働き盛りの年頃を指すのだそうです。中には３０代から50代までと年代を区切る辞書もあります。教会によっては「壮年会」が組織されていないところもあるようです。私は結婚したら壮年会に入るものだと先輩から言われていました。その頃の壮年会は年齢も比較的に高く、あまり元気じゃなかったように思います。正直に言うと、若かったので壮年会に入会したくありませんでした。

5月15日、連盟事務所で「2015年度地方連合壮年会等代表者会議」が開催され出席してきました。
その会議の名称に「等」がついていました。壮年会だけではない、他の何かもいっしょの会議なのだと思いました。全国壮年会連合規約第3条「構成単位」は次のように規定しています。

本会は、日本バプテスト連盟 (以下、「連盟」と略称する。)に加盟する教会及び伝道所 (以下、「教会」と略称する。)の壮年会、兄弟会またはこれに類する集まり、個人(以下、「壮年会等」と略称する。)をもって構成単位とする。それぞれの教会の歴史の中で、壮年会、兄弟会、または組織されていない個人などで組織されているので「壮年会等」なのです。「兄弟会」はあまり耳にしなくなりましたが、「姉妹会」と呼ばれる組織は存在するのでしょうか。「女子会」ならたくさんありそうですね。

私たち東北連合壮年会の2015年度活動方針は４つです。
１「学ぶ」２「知る」３「祈る」４「支える」
テーマは「人と人をねっぱす*神様」です。「ねっぱす*」は、宮城、福島の方言で「くっつけること」「貼り付けること」を指す。人つなぎ、神様を中心に連帯することです。

写真は東北地方連合壮年会定期総会
（2014年10月13日仙台ベストウエスタンホテル）

－神学生　証し－

丸山　勉（東京バプテスト神学校神学専攻科学生　大泉バプテスト教会）

私は大学2年の時、不思議なように導かれた赤塚教会で、同年代の青年たちの内にある「熱いもの」に惹かれ、その半年後に信仰告白へ導かれバプテスマを受けた。その青年会の仲間の一人、沖縄出身のKさんは私に神様に祈ることを具体的に教えてくれましたが、彼はことあるごとに「自分はキリストのバカになりたい」と言っていた。正直その時は彼の言いたい事の本当の意味はよく分らなかったが、もう召されてしまった彼に、私は心の中で語っている。「僕も、キリストのバカになろうとしているよ」と。
強く響いてくる主の言葉がある。「『はっきり言っておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。』ペトロがどのような死に方で神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである。このように話してから、『わたしに従いなさい』と言われた。」（ヨハネ21：18～19）。東京バプテスト神学校は、殆どの先生方が牧会をしながら夜教えて下さる。普段なかなか聞けない教会の現場の課題や痛みを伺うことも出来る。でもその中に、キリストに従いたい！という先生方の情熱を強く感じるのです。教会の衰退がよく言われますが、人は組織ではなく、その中の「いのち」を求めているに相違ありません。主イエスのために残りの命を使い尽くせたら良いと思う。そしてこんな者でも、教会を真にキリストの喜びと慰めに満たす「神の言葉」の奉仕者となれたなら！壮年会連合の皆様のお祈りとお働きの結晶である神学校献金にどれだけ支えられ励まされていることでしょう！

公示（再）　詳細は2015年5月1日発行の第86号を参照ください。

2015年度総会において以下の通り選挙を行います。

- 立候補対象：2016・17年度　日本バプテスト連盟全国壮年会連合会長、副会長　各１名および監査２名
  「全国壮年会連合　規約」第７条および「同　規約細則第２１条」による。
- 立候補締切り：201５年7月31日
- 選挙管理委員会の委員長宛に、書面（様式自由）で届出をしてください。
- 届出先：選挙管理委員長：石井　努　（北関東地方連合壮年会長）
  （〒379-2301　群馬県太田市藪塚町1122-1　日本バプテスト太田キリスト教会気付け）
  選挙管理委員：向井田洋（東北地方連合壮年会長）、北村慎二（関西地方連合壮年会長）、三室日朗（福岡地方連合壮年会長）

「バプテストにおける伝道者養成」その２（注１）

日本バプテスト連盟宣教研究所非常勤所員・恵泉バプテスト教会協力牧師　松見享子

ある年の新任牧師・主事研修会（新任研：注2）では、「葬儀」についての質問が多数出ました。宣研としては「葬儀」について論じ合う時にはその前提として、死というもの、死を超えた命というものをどう捉えるのか、教会で葬儀をするということをどう捉え、その中での牧師の役割をどう捉えるのか、そんな神学的な思考を確認し合いたいと思うわけですけれども、参加者の方はそんなことより「ガウンは着た方がいいか、着ない方がいいか」「着ないならどんな服装がいいか」という具合に、その答え、つまり、即「実践」に役立つハウツーが欲しいようです。「バプテストはガウンを脱いだ教派だ」というような話をそのまま覚えていて、でも今まで通っていた教会の牧師は着ていた、いったいどれが正解か？と。けれども少なくともバプテストでは「ガウンを着る・着ない」ということについて全教会に共通する普遍的な「正解」があるわけではなく、実際には牧師一人ひとり、教会一つひとつが「神学」をしてきた結論として、ある人・教会は「着る」ことを選び、ある人・教会は「着ない」ことを選んできたのです。しかも、たとえ結論は同じでも、そこに至る理由やプロセスはそれぞれ違うということもあり得ます。だから大切なのは結論よりも、むしろそこに至るプロセス、つまりどういう「神学」、信仰理解、合意形成の手段によってその結論が出てきたのか、ということなのです。それで、こちらとしては「では、あなたはどう考えますか？あなたが赴任する教会の考えを聴いていますか？もしもその教会で、ある形での葬儀が行われているとしたら、それはどんな信仰理解のもとに行われているのかということに興味、関心を持って調べたり聞いたりすることが大事なんですよ」と伝えざるを得ないのですが、すると「そんな意地悪を言わないで、すぐに教えてくれればいいのに」と思うのでしょうね、とてもがっかりした顔をされます。

もちろん葬儀というのはある意味「待ったなし」ですから、すぐに使えるマニュアルのようなものがあれば安心でしょうし、その心情はよくわかります。実際に、監督制度や教職制度のある教会なら、その教派の「教理」に従って正しく教えるということが教会での教育の基本です。ここでは、ある「神学」のもとに、一定の年月をかけて導き出された結論（教理）を普遍的な「正解」として受け入れ、継承していくことが重視され、それこそ「ガウンを着る・着ない」についても議論の余地はないのです。しかしバプテストは、聖霊の導きのもとでの一人ひとりの信仰、つまり「私は、どう聖書を読み、どう信じるのか」ということを大切にするので、同じ教会の中でさえ多様な聖書理解や信仰理解が生まれてきます。そういう意味でバプテストの場合には、信徒の数だけ「神学」があるとも言えるでしょう。そして、その違いのある各々の「神学」が対話と祈りをもって吟味され、適宜結び合わされていくことで、各教会の「神学」が形作られていきます。いわゆるハウツーの伝授だけでは済まない、それがバプテストの教育です。
にもかかわらず新任牧師たちが、そのプロセスを割愛して、即ハウツーを求めてしまう、そんな不安や焦りの背景には何があるのでしょうか。一つには、彼・彼女たちの中に、教会が「すぐに『正解』を出して動ける牧師」を求めているという認識があるように思います。しかも時々諸教会や経験のある牧師たちからも「牧師になる人に必要なのは、神学より実践だ！」という声を聞くことがありますから、それはあながち誤解でもないでしょう。この場合の実践とは、ある種の特別な「現場」経験、もっと言えばそうした経験を通して、現場ですぐに使えるノウハウ（一般的には「ハウツー」をたくさん知ることにより蓄積された専門的な技術や経験など）をどれだけ持っているか、と言い換えることができるかもしれません。しかし「新任牧師たちは実践が足りないから、現場を知らないから、教会の現場で対応できない」というのは本当なのでしょうか。

実際のところ、近年私たちは「隣人に出会う旅」や様々なフィールドツアーのように、協力伝道の枠組みの中で積極的に外に出て行き、色々な課題、色々な方々と出会う機会を多く与えられていて、最近の神学生の中には、そういった「現場」を経験している人もたくさんいます。そして、もちろんバプテスト教会出身のその人は、これまで何年も、バプテスト教会という「現場」で生きてきたのです。けれども、その経験が「牧師として教会に立つ」という時にどれだけ結び付いているのか、むしろそのことが問われているのだろうなと思います。「被災地」で仮設住宅の訪問をして、ご高齢の方々にとても喜ばれたと言って帰ってくる。それは素敵なことなのだけれども、自分が通っている教会にもご高齢の方々がいて、一人暮らしの方もいるし、礼拝に出て来られない方もいる。でも、そういう方たちのもとに教会から人を送ったり、一緒に礼拝をしたり、訪問をしたりということには関心が向かないとしたら、それはなぜでしょうか。せっかく良い実践をしても、そのことが自分の信仰にとって、自分が聞いている聖書のみ言葉において、今自分が立たされている教会の現場にとって、どんな意味があるのかということを深めていく作業、「神学する」作業がなければ、そして、それを教会から問われたり、教会と共に考える機会としていくことがなければ、本当に必要とされている伝道者のスキルと言いましょうか、力というものはあまり蓄えられていかないというようなことが起きるのだと思います。

☞　＜４ページに続きます＞